

デジタルアーカイブの研修カリキュラムの再検討（2）

～新しいカリキュラムの展開～

後藤 忠彦、谷 里佐、三宅 茜巳、加治工 尚子、加藤 真由美、眞喜志 悦子

(岐阜女子大学)

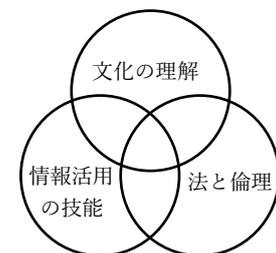
デジタルアーカイブのカリキュラムは、前(Data Report No.9)でも、説明したように、かつての計画、収集、記録、保管、流通、活用の流れ(手順)、ロードマップを中心にしたコア・カリキュラムであった。このことは、ロードマップが示された2000年頃は、現物の情報化のための記録(撮影や保管)等が、重要な課題とされていたことに関わる。しかし、近年では、現物の情報化のみにとどまらないデジタルアーカイブの補完、流通、活用が進み、デジタルアーカイブの構築、共有、活用の視点でのカリキュラム開発の展開が求められている。

(1) 岐阜女子大学の2000年頃のデジタルアーカイブの検討

2000年頃の岐阜女子大学は、デジタルアーカイブ推進協議会が示したロードマップを参考に、計画、収集、保管、活用の手順でのカリキュラムを構成していた。



デジタルアーカイブ・ハンディロードマップ
(デジタルアーカイブ白書 2003 H15.3.31 DA 推進協議会)



2005年～
岐阜女子大学 デジタルアーカイブカリキュラムの基本構成

(2) 「文化の理解」「法と倫理」「情報活用」のカリキュラム (2004年～)

2004年に、文部科学省「現代GP」に採択され、以後、社会人の学び直しニーズ対応教育推進

事業、組織的な大学院教育改革推進プログラムと、一連の GP 関連事業をデジタル・アーキビスト教育の取り組みとして行った。

大学 “デジタル・アーキビストの養成” (2004 年～2006 年)

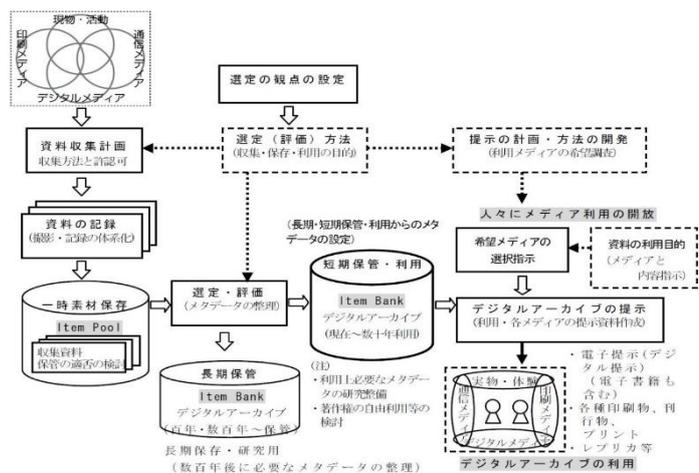
大学院 “実践力のある上級デジタルアーキビスト育成” (2008 年～2010 年)

社会人 “社会人のためのデジタル・アーキビスト教育プログラム” (2007 年～2009 年)

これらの取り組みでは、前記のロードマップの開発プロセスと「文化の理解」・「法と倫理」・「情報活用」の観点からのカリキュラムの見直しがなされた。

現代 GP 等の大学、大学院、社会人のデジタルアーカイブの開発・活用の実践を通しては、多様な課題が生じた。例えば、資料の選定にあたり、著作権、プライバシー等への配慮のみでなく、文化的評価、慣習、社会的背景などを含めた選定評価(項目)の設定や利活用にあたり、PDCA サイクルの必要性も課題となった。

こうした課題への対応を含め、カリキュラムの改善が進められた。その結果、右図のようなデジタルアーカイブの開発のプロセスを基礎にしたカリキュラムが構成された。



デジタルアーカイブの基本構造 (2011 年)

(3) デジタルアーカイブの流通、利活用等の発展

2011 年以後になると、これまで岐阜女子大学で保管されていたコンテンツが社会で広く活用されはじめた。例えば、下の①・②などが活用され、新しい展開がはじまった。

① 沖縄おうらい …毎年 1 万数千名が利用

② 過去のデジタル保管資料の学習指導・学力の向上での活用

①・②では、とくに、人々のもつ課題の解決としての流通・活用が進み、そこでは、資料の利活用を促す還元情報、知的創造サイクル等が重視された。また、国内外でも、デジタルアーカイブの統合、ポータルへとデジタルアーカイブの管理・流通・活用が発展しだした。2016 年頃から進みだした新しいカリキュラムの検討では、例えば、次に示すような記録・保管を中心にしたデジタルアーカイブのコア・カリキュラムの再検討が必要となる。

